



まずはこのような貴重な機会を用意してくださり、支えてくださった皆様に深く感謝しています。この研修会に参加して、普段の生活では経験できない特別な体験をたくさんさせていただきました。研修に参加するにあたり、私は「現地で自分の目でエネルギー政策の実態を確かめること」と「現地高校生と積極的に交流すること」を目標に掲げていました。実際に各施設を訪れ、担当者の方のお話を直接聞くことができたこと、さらに高校生との意見交流を通して自分の考えを伝えることができたことから、目標は概ね達成できたと感じています。

研修の募集を知ったとき、普段の私は、このような活動に積極的に参加するようなタイプではなかったため、正直少し迷いました。しかし、ここで挑戦しなければ何も変わらないし、参加することで新しい学びや出会いがあるかもしれないと思い、思い切って応募することを決めました。

今回訪問したフランスとスウェーデンは原子力発電と非常に関わりの深い国です。フランスは発電量の約7割を原子力発電が占める一方、スウェーデンは水力発電が約4割、原子力発電が約3割を占めており、再生可能エネルギーと原子力発電を組み合わせた電源構成になっています。そんな二か国を訪問し、それぞれの国がどのような考えのもとでエネルギー政策を行っているのかを自分の目で確かめてみたいと思いました。

フランスの「ラ・アーク再処理工場」では、使用済み核燃料の約96%を再利用し、残りのわずか4%をガラス固化体として処理しており、この技術は資源の少ない国にとって大きな希望である一方、廃棄物の最終処分場の確保が現地でも課題となっていることを学び、エネルギーの恩恵を受けている私たちには責任もあるのだと痛感しました。事前に見学した日本原燃のサイクル施設でも再処理について学びましたが、フランスではすでに大規模に再処理が実施され、安定して運用されている点に大きな違いを感じました。一方で、日本では最終処分場の選定が進んでいないという課題があり、エネルギー政策の難しさも改めて実感しました。

スウェーデンでは、日本とは異なり、使用済み燃料を再処理せず、廃棄物を地下の岩盤内に貯蔵するということを知りました。最終処分をする地下の施設は現在建設工事が行われており、工事の過程では元々その場所に住んでいた生物への配慮をしているということを知り、開発を進めながらも環境への配慮を忘れないことも必要だと気づかされました。

スウェーデンの「ロイヤルシーポート」では、都市開発と環境配慮を両立させる取り組みについて学びました。日本では、都市化が進む中で、エネルギー消費や環境負荷の増大が課題となっています。ロイヤルシーポートのように、長期的な視点

で計画的に街づくりを進めることが重要だと感じました。エネルギー問題は発電所だけでなく、都市の構造や人々の暮らしとも深く関わっていることを実感しました。

現地高校生との交流では、日本とは異なりエネルギー問題を自分事として考えている生徒が非常に多いことに驚きました。フランスの「グリニャール高校」には親が原子力発電関連の仕事に就いている生徒が8割ほどいました。さらに、幼いころからエネルギーや環境問題に関して学ぶ機会も多いため、これらの話題に関心が高い人が多いのだろうなと思いました。日本でもエネルギー問題をより身近なテーマとして学ぶ機会を増やし、自分たちの将来に関わる課題として主体的に考える教育が必要だと感じました。一方で、現地高校生の中には、幼い頃からエネルギーや環境問題について繰り返し話題にされてきたことで「エネルギーアレルギー」のようになってしまったと話す人もいました。その言葉を聞き、単に情報を増やすのではなく、正しい情報をわかりやすく、適切な量で伝えることが大切などと考えさせられました。

以前私は、事前研修会でフランスやスウェーデンでは原子力発電の割合が多いということを学んだこともあり、原子力発電が現地の人々にとって身近な存在であるため、これから先も高い割合で原子力発電を使っていくべきだと考えている人が多いと思っていました。しかし、実際には原子力発電の割合を少しずつ減らし、再生可能エネルギーの割合を増やしていくべきだと考えている高校生が多いことがわかりました。

この研修会に参加する前、私は、原子力発電は事故が起こると影響が大きく、危険だというイメージから原子力発電に対して否定的なイメージを持っていました。しかし、エネルギーに関して学んでいく中で、原子力発電は安定的な供給や脱炭素、燃料コストの安定など様々な点から必要不可欠な発電方法だと知り、原子力発電も重要な選択肢の一つとして活用していくべきだと考えるようになりました。

日本は今後、火力発電の割合を減らしながら、原子力発電と再生可能エネルギーをバランスよく組み合わせしていくべきだと私は考えます。再生可能エネルギーは環境への負担が少ない一方で、天候に左右されやすいという課題があります。その不安定さを補うためには、安定した電力供給が可能な原子力発電の役割も重要になると思いました。しかし、原子力発電を活用していくためには、安全対策を徹底し、廃棄物処理の問題から目をそらさず、国民に丁寧に説明し続けることが必要だと感じました。立場や価値観が異なる人々と対話を重ねながら、より良い解決策を探っていく姿勢こそが、これからのエネルギー問題には不可欠だと学びました。

文化交流では日本のお菓子や、伝統的な文化を体験してもらい、楽しんでもらったのがうれしかったです。特に、日本のアニメや漫画は多くの現地高校生が知って

---

いて、驚きました。普段の生活では英語を話す機会がないので、コミュニケーションをとることに不安を感じていましたが、完璧な英語を話せなくても、自分の思いを伝えようとする気持ちがあれば、相手に理解してもらえることを実感しました。これから、グローバル化が進む社会では英語は必ず必要になると、交流を通して強く感じました。

数々の有名観光地を訪れましたが、その中でも特に心に残ったのは「モン・サン・ミッシェル」でした。生きているうちに一度は行ってみたいと思っていた場所だったので、実際に自分の目でその景色を見たときは、とても感動しました。海に囲まれた幻想的な景色や、長い歴史を感じさせる建物の美しさは、写真で見るとは全く違う迫力がありました。

私は以前から海外とかかわりのある仕事に興味がありましたが、研修会に参加しより強く国際的な仕事に就きたいと思うようになりました。現地を訪れて、異国の良さを発見できた一方で、自国の良さに気付くきっかけにもなりました。

この研修会に携わっていただいた青森商工会議所の方々、東北エネルギー懇談会の方々、現地ガイドさん、資料の作成などを手伝ってくださった先生方、一緒に研修会を乗り越えた5人の仲間、背中を押してくれた家族、たくさんの方々の支えがあってこの研修会を無事に終えることができました。本当にありがとうございました。この研修で得た学びや気づきを一時的な経験で終わらせるのではなく、自分の進路や将来の選択にしっかりと生かしていきたいと思えます。

